

# 博士論文

## 5・6世紀ガリアにおける司教権力の成立と展開 (要旨)

広島大学大学院文学研究科人文学専攻  
博士課程後期 歴史文化学（西洋史学）教育研究分野  
D133847 上杉 崇

西ローマ帝国の統治機構の停滞や、ゲルマン諸部族の国家建設といった、根本的な構造転換を経験していた5・6世紀のガリアにおいて、帝国内の他地域に比して特徴的な現象とされるのが、セナトル貴族の司教職への進出である。セナトル貴族とは、門閥相互の血縁関係を基盤として、同時代のガリアを主導した、ローマ系の最上位層の人々である。彼らは、帝国や領土といった観念にとどまらず、行政や経済、文芸といったあらゆる文物に及ぶ「ローマ」の担い手たることを自覚していた。他方で彼らは、西ローマ政府のイタリア重視政策の過程で事実上放棄されることになった、故地ガリアへの帰属意識をも有していた。帝国官職への就任、ゲルマン諸部族国家への奉仕といった、さまざまな選択肢のなかで、彼らの社会的地位を維持するうえで有力なものとなったのが、相対的に安泰と目された司教職への就任であった。これに伴い、ガリアの指導者という彼らのもっていた側面が、司教位と結びついたのである。

こうした現象を把握するために用いられたのが、「司教支配 (Bischofsherrschaft)」と呼ばれる概念である。これは本来、とりわけカロリング期にフランク王国と教会との結びつきが深まったことにより、支配の担い手として台頭したガリア司教を描写するために、ドイツ学界において生み出されたモデルである。この体制が段階的に形成されていったことを実証するために、「司教支配」概念は先行する5・6世紀のガリアへと遡及的に適用されることになった。

その際に主要な論点となったのが、西ローマやフランクといった中央機関との関係において、ガリア司教が自身の権力をいかにして確立したかということであった。具体的には、司教が中央機関から権力を「委譲」されて、その代理人として存在したのか、あるいは中央機関の不在に乗じて、もしくはその意志に反して権力を「篡奪」して、新たな支配の担い手となったのかという、対立する二つの見解の間で論争が展開されたのである。こうした論争のなかで描かれたガリア司教像は、都市において「公的」な存在として活動するというものであった。このモデルはやはりドイツ学界で「司教の都市支配 (bischöflichen Stadtherrschaft)」と称せられ、長くガリア司教研究の基盤であり続けてきた。

こうした「司教支配」像にたいして、近年批判的な検討がなされている。同時期のガリア諸都市には、都市のエリート層や帝国の役人などの有力者が存在しており、司教との協力、対立関係を築いていたことが明らかにされつつある。こうした動向は、5・6世紀ガリア司教による「支配」や、その根拠となる権力を所与の前提としてとらえずに、周辺の状況をふまえて、より適切な意味づけを行う必要があることを示している。そのためには、情勢の変化のなかで、彼らがいかにして権力を構築し、発展させていったかが問われなければならない。本論文は、こうした観点に基づいて、5・6世紀ガリア司教に関する諸事象の分析から、彼らの権力の成立、展開の様相を検討した。

まず、同時代における聖俗の諸勢力の思惑が反映された、司教選出の規定と実態について検討した。5世紀において、ガリア司教はまず同僚間のネットワークを重視してお

り、司教選出の規定においても、首都司教管区を同じくする複数の司教による選出が定められた。他方で規定には、伝統的に司教選出の主体であった都市民の権利も記された。司教の出身地が赴任地と異なる例は多く、基盤が盤石ではなかったため、都市民の承認も重視されたのである。470年のブルジュ首都司教選出を主導したクレルモン司教シドニウスが、近隣司教への協力を要請し、かつセナトル門閥の出身者を推薦してネットワークへの帰属を示すと同時に、ブルジュ市民の意志にも配慮したのは、その証左といえる。6世紀に入ると、ガリア司教は、カトリックを選択したフランク王国との連携を画策した。同時代の史料からは、フランク諸王による司教選出への介入の事例が多数知られる。他方で彼らは、都市での権力基盤確立への試みを続けてもいた。そうした状況は、規定にも現れている。まず、都市民による候補者の選出という「古い形式の制度」が現れる。ガリア司教は、この時点で実効性のないこの形式をもちだすことで、都市の代表者としての自身の立場をフランク王権に示そうとした。同時に、王権への配慮を示すために、「国王の意向」を併記したのである。

次に、司教選出をはじめ、ガリア司教の活動全般の根底にあった、二つの司教間ネットワークについて考察した。一つは、5世紀初頭に創建された、レランス修道院での修練を経てガリア南部の諸司教座に進出した司教たちのネットワークである。このネットワークは、5世紀半ばのアルル司教ヒラリウスの指導下に最盛期を迎えたが、その後内部での派閥争いや教皇レオの介入によって動揺した。5世紀末以後は西ゴートやイタリアとの協力がめざされたが、6世紀前半には解体へ向かった。いま一つは、ガリア中部のオーヴェルニュを中心としたネットワークである。これは、元来俗界のセナトル貴族たちにより形成されていた人的関係が、彼らの司教座進出により、司教相互のそれへと移行したものであった。このネットワークは、都市クレルモンを中心として、5世紀には西ゴートによる攻撃と支配、6世紀にはフランク諸王の勢力争いに相対して、成員間の連携を維持し続けた。

そして、ガリア中部の都市トゥールの司教の動向から、多様な展開をみせたガリア司教による権力形成の一事例を検討した。4世紀後半のトゥール司教マルティヌスは、病氣治癒などに基づく住民の改宗と、司教区内での教会の設置により、キリスト教に基づく都市形成の素地を同市にもたらした。5世紀後半になると、トゥール司教は様々な側面から「権威」を構築した。まず、前述のオーヴェルニュ=ネットワークの一員であることを「権威」とした。また、教会会議を主宰して、管区内外から出席者を募って影響力を示す一方で、条文等により自身を筆頭とした管区の統一を強調して、首都司教としての「権威」を提示した。さらに、前任者マルティヌスを「トゥールの聖人」として示し、その信仰による「権威」を求めた。さらに、マルティヌスの司教在位期に首都司教管区が創設されたことから、自身が「最初のトゥール首都司教」マルティヌスの「権威」に連なることを強調した。5世紀末には、クローヴィスの改宗を司ったランス司教レミギウスらがフランクとの協力を模索するなかで、トゥール司教はマルティヌス信仰をつ

うじてクローヴィスとカトリックの結びつきを強化し、ガリアにおける地位を高めようとした。そして6世紀後半のトゥール司教グレゴリウスは、フランク諸王による同市の領有争いや、都市内部の抗争に対処するなかで影響力を強めた。他方で、マルティヌスを「トゥールの聖人」のみならず、「フランク＝ガリアの聖人」として提示することで、その信仰をさらに推進し、フランク支配下のガリアにおける自身の立場を強化することに努めた。

これらの検討から、5・6世紀ガリア司教の権力は、「司教支配」論で想定されているような確固としたものではなく、彼らが周囲の状況に適合するかたちで戦略的に構築したものといえる。この事象は、拠って立つべき権力の中心が存在せず、諸勢力の分立状態にあるなかで、いかにして自身の基盤を成立させるかという、同時期のガリアにおいて広く行われていた試みの一環として解釈すべきものであると思われる。

こうした5・6世紀ガリア司教の動向と、古代から中世への移行との関係を考えると、「ローマ」の継受という問題が現れる。前述のとおり、ここでいう「ローマ」とは、行政や経済、文芸など、ローマの生み出したあらゆる文物を含むものである。当初、その担い手は当然ながら帝国およびその運営を担う人々であった。その後、帝国政府が漸次弱体化するなか、新たに「ローマ」の主要な担い手となったのが、司教を指導者とする教会であった。とりわけ5世紀ガリアにおいては、セナトール家系出身の司教たちを中心に、自身の権力構築にあたって「ローマ」を活用するという事態がみられた。こうした試みのなかで、ガリア司教にとっての「ローマ」は、「都市の要人」「聖界の指導者」「聖人信仰の統率者」などとともに、自身を構成する主要な要素となったと考えられる。さらに、6世紀にガリアの統治を担ったフランク王権にとって、人口比率のうえで多数のローマ系の人々との関係を築くためには、「ローマ」の理解は重要な問題であった。そこでフランク諸王が参照したのが、相互の連携によってガリアの広範な地域を包摂しており、なにより先んじて「ローマ」を自身の支配者像に組みこんでいた司教たちであったと思われる。そして、司教をつうじて「ローマ」の理解に努めた彼らは、それを自身の統治に活用していったと考えられるのである。

このように考えると、ガリア司教は帝国とフランク王権の中間に位置し、「ローマ」の継承に密接に関与していたといえよう。そして、各々の場面で現れる「ローマ」は、それを運用する主体の置かれた状況に応じて変化すると考えられる。そのような性質をもつ「ローマ」と、さまざまな情勢や関係のなかで対峙し続けることを求められるガリア司教の研究は、古代から中世への移行期と称される時代の諸段階にたいするより詳細な検討を加えていくうえで、重要な手がかりを提供するものとなると考えられる。